

# 高等学校におけるシチズンシップ教育の実践

— 身近な地域社会での課題解決に向けた取組みを通して —

普川 芳昭<sup>1</sup>

若年層を中心とした投票率の低下傾向や裁判員制度の導入などにより、社会の構成員としての自覚と責任が一層強く求められていることから、今日、シチズンシップ教育の必要性が高まっている。本研究では、主体的に社会や政治に参加していく意識や態度の向上を目指すために、基礎的・基本的な知識を習得させ、その活用場面として参加体験型授業を公民科の中で実践した。その結果、生徒の社会への関心や課題意識が醸成された。

## はじめに

近年の若年層を中心とした選挙での低い投票率は民主主義制度を維持する上での課題とも言える。また、平成21年に導入された裁判員制度は新聞等の報道で頻繁に取り上げられるなど注目を集めている。こうしたことから、今日、市民の政治や司法との関わりについて関心が寄せられている。さらに、少子化や核家族化、都市化等の進行に伴い、地域社会における人間関係の希薄化が懸念されることから、一市民として社会との関係を構築することが必要である。そして、そのために必要な能力の育成が求められる中、学校教育にその役割を期待するところもますます高まっている。

平成18年12月に公布・施行された改正教育基本法では、新たに「教育の目標」が規定され、その中で「公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」が掲げられた。また、平成20年1月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」においても、「身近な地域社会の課題の解決にその一員として主体的に参画し、地域社会の発展に貢献しようとする意識や態度をはぐくむ」ことがますます必要となっているとされている。

このような社会的な要請に応じるため、神奈川県教育委員会では、「積極的に社会参加するための能力と態度を育成する実践的な教育」をシチズンシップ教育として位置付け、これからの社会を担う自立した社会人を育成するための取組みを始めたところである。

そこで本研究では、社会に出て行く準備の最終段階とも言える高等学校において、基礎的・基本的な知識の習得と合わせて、社会への参加体験活動を実践することで、生徒が積極的・主体的に社会に参加する能力と態度の育成を目指した。

なお、本研究での用語は、県教育委員会が使用している「シチズンシップ」とする。

## 研究の内容

### 1 研究の背景と目的

#### (1) 研究の必要性

本県では、平成19年度からシチズンシップ教育実践研究校を指定し、「政治意識を高める教育」等について実践研究を行い、平成22年度からは3年に一度行われる参議院議員通常選挙の機会等を活用して全県立高校において模擬投票の実施を開始した。さらに、平成23年度からは、①政治参加教育、②司法参加教育、③消費者教育、④道徳教育を柱としてシチズンシップ教育を本格的に実施することとしている。

これに先駆け経済産業省では、有識者等による研究会を設置し、平成18年3月に「シチズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会報告書」（以下、「報告書」とする）をまとめ、シチズンシップ教育に関する提言を行っている。「報告書」（経済産業省 2006 p.20）では、シチズンシップについて、「多様な価値観や文化で構成される社会において、個人が自己を守り、自己実現を図るとともに、よりよい社会の実現に寄与するという目的のために、社会の意思決定や運営の過程において、個人としての権利と義務を行使し、多様な関係者と積極的に（アクティブに）関わろうとする資質」と定義している。また、シチズンシップに必要な能力を身に付けさせるには、「適切な学習機会を提供する」と共に、シチズンシップを体験するための「参画の場を確保する」（p.29）が必要であるとしている。つまり、教育基本法等で求められている主体的な社会形成への参画を具体化することがシチズンシップ教育には有効であると言える。

望ましい社会を形成していくためには、あらゆる世代が積極的に社会へ参加し、自らの意思表示を行い、意思決定の過程に関わる必要がある。しかしながら、社会の意思決定プロセスへの参加の一つである国政選挙における年齢階層別の投票率を見ると、20～24歳では、平成21年8月に実施された衆議院議員総選挙で46.66%（全国総数69.28%）、平成22年7月に実施された参議院議員通常選挙で33.68%（同57.92%）

1 神奈川県立深沢高等学校  
研究分野（シチズンシップ教育）

となり、いずれも投票権を得た直後の階層の投票率が最も低くなっている（投票率は総務省調査）。

こうした社会状況の中で、積極的・主体的に社会に参加しようとする能力や態度の育成を目的とするシチズンシップ教育には大きな期待が寄せられている。

## (2) テーマ設定の理由

これまでの教育活動から、生徒に課題意識をもたせるためには、その課題が生徒の身近なところに存在していること、生徒にとって必要な事柄であること、具体的で分かりやすいことが重要であると考え。

大野（2005）は、地域社会に学ぶということは子ども自身が、「地域の様々な問題に気づき、その問題解決を通して、地域の一員としての自覚を育むという最大の意義がある」とし、市民としての資質やシチズンシップの育成につながるとしている。

これらのことから、生徒に自らが社会の構成員であると実感させることを目的として、生徒が課題意識をもちながら、社会形成への参画を体験できるようにテーマを設定した。最も身近な地域社会の具体的な事象に触れることで、生徒は自己に関わることとして捉え、社会の一員としての自覚と責任が芽生えるだろう。これにより主体的に社会に働きかけることの意味を見だし、政治参加への契機とすることが期待できる。

## 2 研究の方法

平成21年3月改訂の高等学校学習指導要領（以下、「新学習指導要領」とする）総則の中では「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力」等の育成が強く求められている。

本研究では、公民科の授業で、生徒に民主主義の理念と意義について基礎的・基本的な知識を習得させ、その効果や理解度を測るために地域社会や政治等に関する生徒の意識調査を授業前後に実施した。

しかし、シチズンシップ教育には、知識の習得にとどまらず、積極的に社会に参加する能力と態度の育成が期待されている。つまり、習得した知識を活用して政治や司法、経済など社会のシステムに参加しようとする意識や、参加を可能にするスキルを身に付けるための学習が不可欠となる。三堀（2009）は、シチズンシップ教育の最終的な目的を「生徒自らの発信や行動」とした上で、そのためには「問題解決的な学習活動」が有効であるとしている。そこで、基礎的・基本的な知識の習得後には、知識の活用場面として、生徒が実際に地域社会の問題解決を目指し、調査及び検討を行い、その内容を基に意見を発信したり、行動したりすることができるような参加体験活動を取り入れた。

一連の取組みを終えた時点で、更に生徒の意識の変容を測り、知識の習得後に行う具体的な体験活動がシチズンシップの育成に与える効果を検証した。

## 3 検証授業

### (1) 検証授業の概要

実施期間	平成22年9月21日～10月15日
対象生徒	所属校第1学年 3学級（101名）
授業時数	7時間
単元名	現代社会「地方自治の役割や課題」 「変化する地方自治」

### (2) 単元の設定

検証授業では、習得した知識を活用して地域社会へ働きかける機会となるよう単元を設定した。地方自治の基本的な考え方や仕組みを理解させるだけでなく、主権者として、また、地域住民としての自覚を育て、地域社会の発展のために自分たちにできることを考え、行動する態度を身に付けさせることをねらいとした。

『高等学校学習指導要領解説 公民編』（文部科学省 2010）では、本単元にあたる「（2）現代社会と人間としての在り方生き方」の「イ 現代の民主政治と政治参加の意義」について、「地方自治に触れながら政治と生活との関連について認識を深めさせる」など、「身近な生活にかかわる事例を通して理解を深めさせるようにする」ことが大切であるとしている。

これを踏まえ、生徒が積極的・主体的に社会に参加する能力と態度の育成を目指し、民主主義の基本的要素である住民自治に関する学習、学校周辺地域での調査、解決に向けた手続きの検討等の活動を行った。

### (3) 事前意識調査

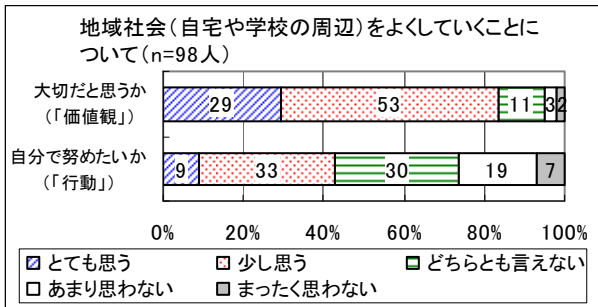
授業に先立って実施した生徒の意識調査では、「ニュース番組を見たり、新聞を読んだりしているか」という質問に対して、週5日以上行っていると答えた生徒が約75%、また、「政治や経済などの社会問題は自分の生活と関係があると思うか」という質問に対しては、「とても思う」と「少し思う」を合わせた約85%の生徒が肯定的な回答をした。さらに、シチズンシップ教育の一要素である政治参加という視点から、「選挙権を得たら投票したいか」と尋ねたところ、約61%の生徒が肯定的な回答をしている。これは、平成22年7月に実施された参議院議員通常選挙における投票率57.92%をわずかながら上回る結果となった。

また、「地域社会（自宅や学校の周辺）をよくしていくために働きかけていくことは大切だと思うか」（以下、「価値観」とする）、「地域社会（自宅や学校の周辺）をよくしていくために自分で努力したり働きかけたりしたいか」（以下、「行動」とする）について、それぞれ質問したところ、肯定的な回答が「価値観」では約84%であったのに対して、「行動」では約43%となり「価値観」のおよそ半分にとどまった（第1図）。

これらの調査結果から、生徒の意識には次のような傾向があると考えた。

- ① 社会や政治への関心が決して低いわけではない。
- ② 社会に関わることの大切さは感じている。

③ 自ら社会に働きかけることまでは考えていない。そして、①②と③の間に見られる意識傾向の差こそが、「主体的に社会の形成に参画」することが求められている今日、シチズンシップ教育の重要な課題であると考え検証授業を行った。



第1図 生徒の事前意識調査(授業前)

#### (4) 検証授業の内容

【第1、2時】(基礎的・基本的知識の習得)

地方自治の仕組みや役割、課題等について、記入式プリントによる学習を通じて、基礎的・基本的な知識を習得させることを目指した。具体的には、地域行政が住民の意思に基づいて行われることを理解させるために、条例の制定や議会の解散、首長・議員らの解職などを求める直接請求権など住民自治の概念について大きく取り上げたり、生徒が更に具体的に捉えることができるように、実際に行われているリコール運動を新聞記事から紹介したりした。また、政治、行政をより身近に感じさせるために、県や市では住民が地域行政に対して意見を提案できるウェブページを設けていることや、中学1年生が請願者の代表となって制定された条例、さらに、市の条例策定の際に地元高校生と意見交換を実施した例があることなどを紹介した。

生徒からは、「高校生なので政治は程遠いものだと思っていたけれど、その気になれば政治に参加することも可能だということを知った」など、政治等に対してそれまで感じていた距離感が縮まったと思われる意見を聞くことができた。

【第3、4時(2時間連続)】(学校周辺の課題調査)

主体的に社会に参加する契機となるような体験的な活動として、学校の周辺地域の調査を実施し、5~6名のグループごとに不便や危険と思われる箇所など改善すべき地域社会の課題を生徒に探させた。その際、生徒には、自己に関わりのあることとして捉え、また、自分たちの都合だけでなく、高齢者や障害のある人など他者の立場で考えて社会全体のための調査とするよう指導した。発見した課題は写真に記録させた。また、教師は、生徒の調査の様子を実際に



第2図 生徒による調査の様子

観察しながら、着目すべき点などについて適宜助言した。

調査の結果、生徒からは、赤、青の色が識別しにくい歩行者用信号機や、災害時の避難場所を兼ねた地域住民のレクリエーション広場が雑草に覆われている状況、見通しが悪い交差点(第2図)などの課題があることに気付いた様子を見ることができた。

【第5、6時】(課題整理と資料作成)

発見した課題について問題点を整理し、解決に向けた方策、例えば、自治体に対応を求めたり、地域の町内会に働きかけたりすることなどをグループごとに検討させた。次に、検討内容を基に、市役所などのホームページを参考にさせながら、プレゼンテーションソフトなどにより発表用資料を作成させた。また、他者へ依頼するだけでなく、自分たちで解決するための具体的な行動についても考えさせた。

【第7時】(検討内容の発表と提案意見の決定)

本時までに作成した資料をパソコンとプロジェクトを使用し、投影しながらグループごとに説明させた。各グループの発表後に、最も緊急性の高いもの、社会的に対応が求められるものという観点により、実際に意見として発信すべき課題を各学級一つに絞り込んだ。

イギリスにおけるシチズンシップ教育の生みの親とも言えるバーナード・クリック(2003)は「政治の本性とは、多くのひとびとのあいだで正当なものとして受け入れられる方法によって紛争を調停し和解させること」としている。本県のシチズンシップ教育の柱の一つである政治参加教育という視点から、異なる意見の調整機能として政治の果たす役割を強調しながら、優先順位を付けて考えさせることに留意し、学級内での意見の集約を行った。

#### (5) 検討結果の意見発信

第7時における主な検討結果は次のとおりである。

##### ① 藤沢駅周辺に設置されている「駐車場案内システム案内板」

- ・「休止中」と表示されているが、案内板として利用されているのか。
- ・これまでの利用実績はどれくらいか。
- ・使用されていないならばそれはなぜか。
- ・将来的にはどう扱うのか。

##### ② 見通しが悪い県道と市道の交差点(第2図)

樹木により交差点の見通しが悪くなっている。現地には交通事故があったことを示す立て看板があることから、せん定作業や注意を促す案内板、カーブミラーの設置など対応が必要ではないか。

これらのことについて、提案したグループと相談の上、藤沢市市民相談情報センターに照会した。

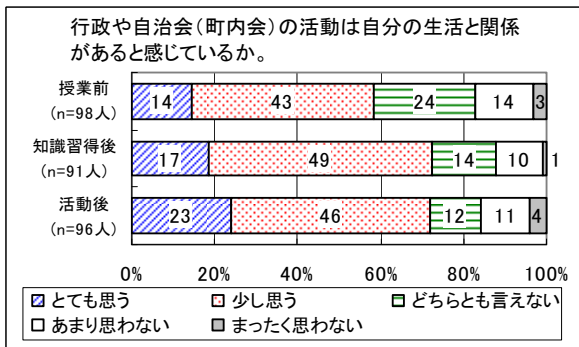
#### 4 検証授業後の生徒の変容

##### (1) 社会への関心の高まり

知識習得の前後及び活動後の3回にわたり実施した

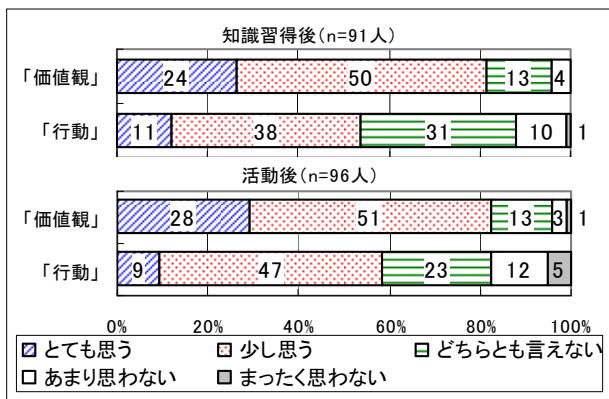
生徒意識調査による検証結果は次のとおりである。

「行政や自治会（町内会）の活動は自分の生活と関係があると感じているか」という質問に対しては、「とても思う」「少し思う」を合わせた肯定的な回答の割合は、知識の習得により高まりを見せた。さらに、「とても思う」と回答した生徒は、知識習得後よりも活動後の方が増加する結果となった（第3図）。



第3図 生徒の意識の変容1

第4図は、「地域社会（学校や自宅の周辺）をよくしていく」ことについて、知識習得後、活動後における「価値観」と「行動」の変化の様子を表している。これを授業前（第1図）と比較してみると、「価値観」では、「とても思う」「少し思う」を合わせた肯定的に捉えている生徒の割合はいずれも8割以上を占めているが、活動の過程で数値の変化はほとんど見られなかった。一方、「行動」を授業前と活動後で比較すると、肯定的な回答が約43%から約58%に増加した。

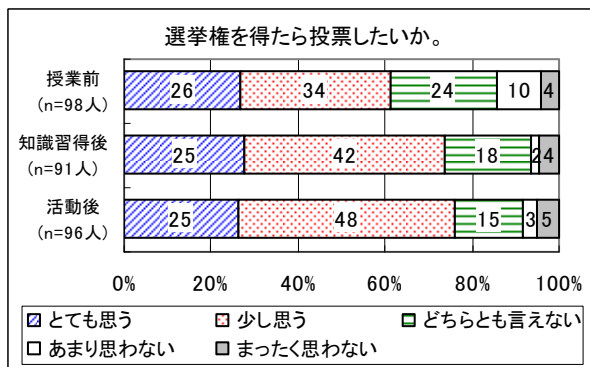


第4図 「価値観」と「行動」の差の変化

ここで注目すべきことは、活動に伴い「価値観」と「行動」の差に変化が見られたことである。「とても思う」「少し思う」を合わせた肯定的な回答について、先述のとおり授業前では「価値観」が約84%、「行動」が約43%となり、その差は41ポイントであったが、知識習得後では27ポイント、活動後では24ポイントとなり、「価値観」と「行動」の差が縮まってきていることが分かる。こうしたことから、基礎的・基本的な知識の習得により、社会の意思決定や運営に関わろうとする意識は高まるが、さらに、参加体験活動を取り入れることで、「行動」が「価値観」に近付いてくると考えられる。しかし、「行動」について授業前と活動

後の比較では、「あまり思わない」「まったく思わない」を合わせた否定的な回答は減少しているものの、知識習得後と活動後を比較した場合、否定的回答が増えたことは課題である。否定的に捉えた生徒のうち、4割近くが「面倒くさい」と答えていることから、体験活動を行ったことで自ら積極的に関わりたいと感じてしまったことが要因であると考えられる。

次に「選挙権を得たら投票したいか」と尋ねたところ、肯定的回答は次第に高まりを見せた（第5図）。また、第1、4図の「行動」で、「とても思う」と答えた生徒は、「選挙権を得たら投票したいか」の質問に対して、授業前の9名では、「とても思う」「少し思う」「どちらとも言えない」が各3名、知識習得後の11名では、「とても思う」「少し思う」が各5名、「どちらとも言えない」が1名であった。ところが、活動後では9名中8名が「とても思う」と答え、「少し思う」が1名という結果になった。活動を経て地域への働きかけと選挙での投票意識が結び付く傾向がありそうだが、両者の相関係数を算出すると、数値は0.417にとどまり、中程度の相関しか見られなかった。近い将来、選挙権を得る高校生に対して、シチズンシップの育成を図るためには、地域への主体的な参加も、投票行動も自らの意思表示の方法であるということ、活動の過程で強調して指導することが必要である。



第5図 生徒の意識の変容2

そして、生徒の振り返りからは、社会への関心の高まりを表す意見が次のとおり見られた。取組みのねらいである社会への主体的な関わりについて、その必要を感じ、今後も関心を寄せていたいという感想である。

＜生徒の振り返り・感想＞ 【社会への関心】

- ・自分の家の周辺なども少し気にして見てみようと思った。そして、自分にも何か出来ないか考えてみるのが大切だと感じた。
- ・地元などで改善すべき問題を見つけたら、自分で意見を出そうと思いました。
- ・普段は意識していなかったけど早く改善しなければならぬ問題もあった。見つけたら終わりではなく行動にうつさなければならない。

このように、地域社会への参加体験活動を通して、

周囲を注意深く観察したり、自らの意見を発信したりすることの必要性に気付き、取り組もうとする意識が高まった様子が見られる。

## (2) 課題意識の醸成

また、振り返りからは、課題意識の深まりが感じられる意見が生徒の約7割に見られた。特に、地域社会で生活する上での不便、危険な箇所を取り上げる活動を通して社会参画を図ったため、生徒が地域の現状を注視したことで課題意識が醸成したものと思われる。

### <生徒の振り返り・感想> 【課題意識】

- ・注意しながら歩いたらとてもいろんなことに気付いた。もっと改善してほしいところがあった。
- ・あまり課題はないと思っていたが意外とあり、もっと地域社会に目を向けるべきだと思った。
- ・身近でこんなに解決したいことがあるとは思わなかった。少し地域の人に協力できて嬉しい。
- ・思っていた以上に改善すべき点が多く、びっくりしました。もっと地域の高校や中学校などが協力し、役所や管理団体に意見を述べたほうがよいと思いました。

上に示したように「気付いた」や「意外」など、活動を通して初めて認識したことを表す意見が数多く寄せられた。このことから、今回のような参加体験型の活動など生徒が地域社会とつながる機会を設けることで、生徒は地域社会を自分に関わる空間として捉え、課題が存在していることに気付いたと考えられる。

## 5 研究のまとめ

### (1) 成果

このように、生徒には社会への関心や気付きが新たに生まれたが、加えて、課題がありながら改善されていない現実を直視したことで、批判的に考察しようとする態度が養われている様子を見ることができた。

2002年にシチズンシップ教育を必修教科として導入したイギリスでは、2008年からの新カリキュラムに「批判的考察と探求」「意見表明と代弁」等を、教科を基礎付ける「キープロセス」として設け、取組みを進めている(奥村 2009)。シチズンシップ教育の重要な要素である批判的思考の高まりを表す前述のような感想は、実際の体験に基づくものであり、知識を習得しただけでは表れにくい反応であると言える。社会への参加を体験したことで生まれた生徒の疑問や批判的思考は、やがては社会参加や政治参加の契機となることが期待できる。

また、生徒からは右上に示したように意識の変化を表す感想も寄せられた。それまでの日常生活では、必ずしも認識していなかった目の前にある事象について、以前とは異なる視点により、自らに関わることとして捉えている様子がうかがえる。現実の社会と向き合わせることの意義を確認できた。

### <生徒の振り返り・感想> 【意識の変化】

- ・日常生活でも周囲の課題を考えるようになった。自分の考えが変わって驚いている。
- ・授業をきっかけに自分たちが調べたところを見ると、見てしまうようになった。地域の事に触れられてよかった。
- ・最初の印象は面倒だと思っていたけど、校外学習をして印象が一気に変わりました。今まで通ったことのない道を通って、普段とは違う視点でその場所について見ることができ、それに対して疑問も出たりしました。もっと違う視点で物事を見ていかないといけないと気付くことが出来たのでこの学習が出来てよかった。

### (2) 課題

一方で、取組みの様子からは、シチズンシップ教育を進める上で次に挙げる三つの課題が見られた。

まず、「新学習指導要領」で大きく取り扱われている「言語活動の充実」を図ることである。検証授業第7時では検討内容をグループごとに発表する場面を設けたが、自分の意見を論理的に分かりやすく他者に伝えることに不慣れな面が見受けられた。自分の意見を的確に他者に伝えることはシチズンシップには欠かすことのできない要素である。

二つ目は、「プレゼンテーション力」の育成である。収集した多くの情報を効果的に分析・処理し、考えたことを相手に伝える力もシチズンシップの大切な要素である。プレゼンテーションの技法や態度も備えておくべきであると感じた。

さらに、「他者と交流する力」が不可欠である。OECD(経済協力開発機構)によるプロジェクトで定義された、「人生の成功」や「正常に機能する社会」を目指すために必要な能力(キー・コンピテンシー)の一つのカテゴリーに「異質な集団での交流」がある。ここでは、現代においては、個人で目的を達成することは困難であるため、要求や目標のために他者と協力する能力や、互いのニーズや利害を考慮しながら、社会での対立を処理、解決する力などが求められるとしている(ライチェン・サルガニク 2006)。今回行ったようなグループ活動では、協力体制をいかに築いていくかが重要となる。チームで協力して課題解決に臨んだり、あるいは改善に向けて他者に対して働きかけたりすることは、社会との関わりを重視するシチズンシップ教育の要素であると考えなくてはならない。

### (3) 推進のために

シチズンシップ教育が、積極的に社会参加するための能力と態度を育成する実践的な教育であることを考慮すれば、一部の教科、教員で実施するのではなく、年間指導計画に基づいた教育活動として継続的に取り組むことが効果的である。

また、感想にも見られるように、生徒は必ずしも、

地域社会を興味・関心の対象として見ているとは限らない。そこで、まずは、生徒が感じている地域社会との距離感を縮め、自己に関わることとして捉えられるようにすることが求められる。検証から見えた成果や課題を踏まえ、効果的なシチズンシップ教育を推進するための在り方を考えると次のような点が挙げられる。

### ① 総合的な学習の時間の活用

基礎的・基本的な知識の習得は公民科等の教科で行い、知識の活用場面としての参加体験的な活動は、総合的な学習の時間を用いる。これにより、全教職員がシチズンシップ教育に携わることが可能となる。

さらに、地域社会への参加体験活動は、自ら課題を見付けて解決する資質や能力の育成、また、問題解決や探究活動に主体的、協同的に取り組む態度の育成が期待でき、総合的な学習の時間の目標とも重なる。

### ② 教科間の連携

先に課題として挙げた能力を育成するためには、教科間の連携を図ることが望まれる。国語や外国語を始めとした様々な教育活動を通して討論や説明など多様な言語活動を、また、情報科などでは必要な情報を分かりやすく処理、表現し、他者に伝達するといった活動を意識的に取り入れることが見込める。各教科の特性を最大限にいかし、シチズンシップ教育を意識した指導内容となるよう、指導計画の中で教科間の連携が必要である。

### ③ 外部機関との連携

意見を提出した藤沢市の担当者からは「社会問題に対して無関心な方が増えている中で、高校生が地域社会に興味をもち、社会の一員として参加することは、行政運営側にとっても非常に重要なことと捉えており、学生や若年層からの意見も大切な『しみんのこえ』として受け止めています。」とのコメントが届いた。特に今回は提案後、市による具体的対応が得られたこともあり、更に生徒の意識の変容を測ったところいずれの項目でも顕著な高まりが見られた。提案に対する反応を生徒に返すことで、生徒には達成感や更なる疑問が生じ、社会への関心がより深まる。地域の行政機関や町内会、市民団体など外部機関との連携が生徒を社会参加させる手立てとなり、教職員や学校にとって有効な教育資源とすることが期待できる。

また、生徒に達成感を味わわせることを目的と考えれば、実現が十分に見込める課題を取り上げ、提案する方法もあるだろう。地域や学校の実態などを考慮し、目的に応じた取り組みとすることが必要である。

## おわりに

所属校では、平成19年度から3年間にわたり、県教育委員会によるシチズンシップ教育実践研究校の指定を受け、「政治意識を高める教育」として、主に模擬

投票、模擬裁判について研究が行われてきた。今回の取り組みは、政治や司法を始めとした社会への参加の導入として、とりわけ、地域社会への帰属意識を刺激することをねらいとした。こうした最も身近な社会での活動が、シチズンシップ教育の原点であると考えられる。

また、所属校へは今年度赴任したことから、生徒の実態を必ずしも把握しきれない中での研究となった。そのため、授業はいずれの地域、学校においても参考となる汎用的な実践とすることを心掛けた。

本研究が今後のシチズンシップ教育の推進の一助となれば幸いである。

## 引用文献

- 経済産業省 2006 「シチズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会報告書」 ([http://www.meti.go.jp/press/200603300003/citizenship-houkokusho\\_honpen-set.pdf](http://www.meti.go.jp/press/200603300003/citizenship-houkokusho_honpen-set.pdf) (2010.4.7取得))
- 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」 p.9
- 文部科学省 2010 『高等学校学習指導要領解説 公民編』 教育出版 pp.10-13
- 大野順子 2005 「地域社会を活用した市民的資質・シチズンシップを育むための教育改革ー地域の抱える諸問題へ関わることの教育的意義ー」 (『桃山学院大学総合研究所紀要』第31巻第2号) p.107
- ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク編著、立田慶裕監訳 2006 『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』 明石書店 pp.200-215
- バーナード・クリック、添谷育志・金田耕一訳 2003 『現代政治学入門』 講談社 p.26
- 三堀仁 2009 「シチズンシップ教育推進のための研究ーカリキュラム開発と実践ー」 (神奈川県立総合教育センター『研究集録』第28集) pp.37-38

## 参考文献

- 文部科学省 2009 『高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』 海文堂出版 pp.9-13
- 相原実 2008 「シチズンシップ教育に関する調査研究」 (神奈川県立総合教育センター『研究集録』第27集) pp.57-60
- 奥村牧人 2009 「英米のシチズンシップ教育とその課題ー政治教育の取り組みを中心にー」 (国立国会図書館 調査及び立法考査局「青少年をめぐる諸問題 総合調査報告書」) pp.20-21
- 水山光春 2008 「シチズンシップ教育ー『公共性』と『民主主義』を育てる」 (杉本厚夫・高乗秀明・水山光春 『教育の3C時代 イギリスに学ぶ教養・キャリア・シチズンシップ教育』 世界思想社)